フィールドノート
Field Note

言語学者と植物

嘉戎（ギャロン）語の民族植物学

章 舒娅 Zhang Shuya / 日本学術振興会外国人特別研究員、AA研フェロー

**言語学者はその言語が使用される環境、
文化や歴史も研究しなければならない。
中国・四川省での植物語彙のフィールド調査について紹介する。**

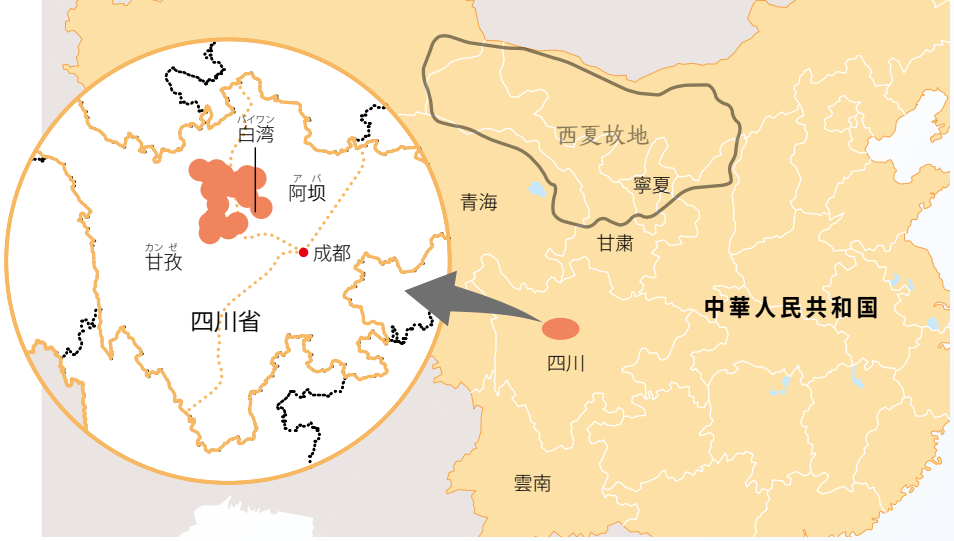
民族植物学と言語記録

1895年、アメリカのJ. W. ハーシバーガー教授は、新しい学際的研究として「民族植物学(ethnobotany)」を提案し、特定の民族が植物をどのように利用するかについての科学的研究であると定義した。その語源は、民族学（ethnology）と植物学（botany）である。この研究法に関しては、フランス人のA. -G. オードリクール（1911-96）に言及する必要がある。彼が民族植物学に言語学の研究手法を導入したためだ。オードリクールは、言語資料を人と植物の関係を研究するための基礎資料とし、それにより民族植物学の研究に歴史的視点を与える、新しい研究方法を開拓した。

フィールドワーカーにとって、この研究法は、学際的研究における言語調査の基本的な役割について問い直すとともに、フィールド言語学に新しい課題を与えるものである。フィールド言語学者は、記述言語学の伝統を守り、言語記録の３つの側面―自然言語データの収集、辞書の編集、文法の記述―を完了する必要がある。同時に、言語記録は、言語自体に限定すべきでないことも認識されねばならない。さらに長い目で見ると、言語学者は言語が使用される環境、および言語の持つ文化と歴史についても研究しなければならない。

ギャロン地域の地形。

＊記載のない写真はすべて筆者撮影。



オレンジの丸（●）がギャロン語の分布域（地図作成協力：頼雲帆）。

ギャロンの地域と植物

オードリクールと L. エダンの共著『文明を支えた植物』によれば、民族植物学を研究するためには２つの言語資料―書写資料、書写伝統のない言語の口語資料―が必要だという。巨大なシナ・チベット語族の中で、書写の伝統を持つ言語は多くなく、また多くの古語には書写資料がない。これらの言語において植物に関する言語資料を入手するためには、言語調査に頼らなければならない。

四川省北西部の阿坝チベット族チャン族自治州と甘孜チベット族自治州は、今日の中国における言語、民族、多様性のホットスポットの１つだ。この非常に神秘的なエリアは「嘉戎（rgyalrong）」と呼ばれている。その名はチベット語に由来し、「女王の暖かい谷」を意味する。

ギャロン語群は、シナ・チベット語族の最も古い分枝の１つであるものの、上述のように書写の伝統がほとんどない。したがって、その語群の言語を調査・記録することには大きな意義がある。

危険な地理的環境が、しばしばその地域を謎めいたものにする。ギャロンはチベット高原南東の麓にある横断山脈に位置し、高山の深い谷と急流の川に囲まれている。そのため、1990年代までこの地域へのアクセスは難しく、都市化が遅れた。この特別な地理的環境は、この地域に豊かな植生と種の多様性をもたらした。最近まで、ギャロンでの主な生活様式は自給農業と畜産業だった。このような生存環境下で、植物は、人々の生産と生活のあらゆる側面（医学、農業など）において重要な役割を果たしており、ギャロンの地域を理解するための重要な手段であると言える。

2019年から、私はギャロン語群の言語学者や雲南中医薬大学の植物学者による共同研究に参加している。共時的（ある同時代の）かつ通時的な（歴史的に見た）言語研究を媒体として、ギャロン地域で民族植物学の研究を行いたいと考えている。共時的には、ギャロン語の植物語彙を収集し、それらの形態解析を行う。それに基づいて、原始語に再構できる古代の植物の語彙を見つけ、固有の植物名と借用語植物名を識別する。この地域のいくつかの植物の古代の性質を言語学的証拠によって明らかにし、原始的なギャロン地域の民族植物文化を解明することを目的としている。

オードリクールスタイルの民族植物学調査

省都・成都とを結ぶ道路交通が便利になるにつれて、ギャロン地域の都市化は不可逆になった。山に隠れた小さな町に外来の物が溢れ始め、周辺の村々に浸透していき、何世代にもわたる農業、織物、畜産のライフスタイルの範囲が徐々に狭まっていった。伝統的な植物の知識、特に野生植物に関する知識は、高齢世代が世を去るにつれてギャロンの人々の生活から徐々に姿を消しており、民族植物学の研究が急務となっている。私たちは植物学者のような現地調査を行うことにした。

典型的なギャロンの村は、川の近くにある村と山の真ん中にある村の２つに分けられ、これらの地域に分布する植物も異なっている。私たちの調査は、白湾郷の加达村で始まった。私は、

①イラクサ（撮影：楊叢衛）。

②中華山蓼（撮影：楊叢衛）。

③小藜（撮影：楊叢衛）。

④華蓼。

⑤牛蒡（撮影：楊叢衛）。

⑥クルミ（撮影：楊叢衛）。

川の近くにあるこの村で、四土（スートゥ）ギャロン語の白湾方言を研究している。

村や田園地帯では、人々を「噛む」可能性のある野生植物イラクサ（*Urtica*）①に注意する必要がある。地元の人は「村があるところにはイラクサがある」と言う。この植物は至るところで育ち、目立たないが、非常に強く人を害する。イラクサの葉は細い棘でいっぱいで、誤って触れた場合、数日間赤みや腫れを引き起こすことがある。調査中、頼雲帆博士（ギャロン系言語の専門家）と私はイラクサに何度も刺された。しかし、イラクサに刺されても慌てる必要はない。どこにでもある中華山蓼（*Oxyria sinensis Hemsl*）②の樹液は、イラクサの痛みを効果的に和らげることができる。地元では「悪いイラクサは私を噛んだが、中華山蓼は私を保護した」とも言う。実際、役に立たない悪い植物はない。イラクサと中華山蓼は、ともに有用な植物である。中華山蓼は、地元の豚の良い飼料だ。食糧が不足しているときは、イラクサを牛に与えることができるし、人間もイラクサを食べることができる。イラクサの葉と小藜（*Chenopodium serotinum*）③を混ぜて、おかゆを作ったりもする。

このようにしながら、私たちは川の近くから山の真ん中まで移動し、登りながら植物を特定した。川近くの村から離れると、インフォーマント（話者）がはっきりと識別できる植物の数は徐々に減っていった。標本袋が満杯になったため、山を降りて調査結果を整理することにした。山のふもとで、収集した標本の植物情報と言語情報を比較した。言語学者の頼博士と私は植物の学名の複雑さを嘆き、同行する植物学者はギャロン語の植物名の意味に驚いていた。ではギャロン語の植物名から何が分かるのか？

名詞の形態と民族植物学の知識

ギャロン語の植物名には、非常に複雑な名詞形態が含まれている。これらを正しく分析することで、植物名の背後にある秘密を明らかにすることができる。

多くの植物名は複合語で、植物の外観や成長の習慣などを説明する情報が含まれている。しかし、植物名は必ずしも直観的に植物の様態を反映しているわけではなく、特定の民族の植物に対する認識を暗示している。例えば、華蓼（*Polygonum cathayanum* A. J. Li）④は、四土ギャロン語の白湾方言で「kəɟɐk-vó（カディヤック ヴォ）」と呼ばれる。これは、「kəɟɔ́k（カディヨック）綿羊」の連結形「kəɟɐk-」と「-vó 腹、腸」で構成されており、そのままの意味は「羊の腸」。しかし、私がその植物を見た時、その物理的な形はすぐに羊の腸のイメージを思い起こさせなかった。インフォーマントの説明によると、「羊の腸」は華蓼の成長過程を反映しているという。華蓼は独自の根茎を持たないため、常に他の植物に付着して（羊の腸のように）伸びるのだ。

植物の「使用法の説明」に基づいた名称もある。例えば、牛蒡（ゴボウ）（*Arctium lappa*）⑤は、四土ギャロン語では「pəɟə-rtsôs（パディヤ ルツォス）」と呼ばれ、名詞語幹「pəɟû（パディウ）鼠」の連結形「pəɟə-」と、動詞語幹「-rtsôs 触る」の複合語である。この語形は牛蒡の「植物トラップ」の機能を明らかにする。地元の人によれば、ギャロン地域では牛蒡を乾かした後、鼠が通りかかる場所に置く。鼠が牛蒡にくっついて、そこから逃げられないと、消耗して死ぬ。私は当初、牛蒡が鼠取りとして使用できることに懐疑的だったが、2021年夏、甘孜州丹巴（タンバ）県莫洛（ボロ）村の民家で、ボイラーの上の棚に牛蒡の鼠取りがぶら下がっているのを見た。伝統的な植物学の豊富な知識に驚かざるをえない。

雲南中医薬大学の楊叢衛先生は植物標本の圧搾を実演している。

ツェワン氏（四土ギャロン語話者）は私にサカプチョという土地についての伝説を教えてくれた（撮影：頼雲帆）。

歴史言語学と考古植物学

中には、共時的に分析できない植物名も多くある。それらが、祖語から受け継がれた古い単語である可能性が最も高い。例えば、ギャロン語群は、シナ・チベット祖語の「ネギ」の名を継承した。これは、同語族で最も古い単語の1つである。四土ギャロン語（東語支）で「ɕkó」、茶堡ギャロン語（北語支）で「ɕku」、绰斯甲語（西語支）で「skû」、西夏語（西語支）で 𗍫 kjụ¹（西夏祖語 *S-kjo「ネギ、韭、蒜」に由来）であり、これらは漢語祖語の「skru² 韭」、チベット語のsgog-pa「蒜」と共通の起源を持っている。この名称の古さから、ネギ属がこの地域で非常に早くから栽培されていたと、疑いなく説明できる。

実際には、「ネギ」のように語族内で明確に語形が対応している植物名は多くなく、ほとんどの植物名の対応はそれほど明確ではない。例えば、一部の植物名は、ギャロン語群の中で前鼻音化有声子音と無声有気子音の対応がある。イラクサについては、四土ギャロン語の「mdzəló」が北ギャロン語の「mtsʰalu」に対応し、クルミ（*Juglans regia*）⑥については、ギャロン主要語の有声子音（茶堡ギャロン語で「ʑɴɢɯloʁ」）が、绰斯甲語の有気音「qʰêle」に対応する。これらの対応については現在完全に説明することはできないが、歴史言語学的には、「不規則な対応は古形を反映し、過去には規則的だった形態を再構する、重要な手がかりでありうる」と考えられる。そのため、「イラクサ」や「クルミ」などの不規則な対応を持つ植物名は、古くから存在しているものである可能性が高い。

それでは、原始ギャロン語の植物名を研究することの意義は何か？　その1つは、この地域の考古学研究に、言語学的証拠を提供できることである。現在、原始ギャロン語に再構できるいくつかの植物名は、考古学者によって発見されたチベット高原の初期の植物と部分的に一致することがわかっている。これらには「小藜」（四rbə-tɕəp，茶rmba-tɕɯβ，绰lbə-vé）；「クルミ」（四ʑgaló，茶ʑɴɢɯloʁ，绰qʰêle）などが含まれる。

フィールドワークへの民族植物学調査の啓示

言語調査を通して、民族植物学に学術的根拠を与えるとともに、植物名を研究することは、言語調査にも多くの啓示を与えてくれる。調査中に、（言語学的には根拠のない）「民間語源（Folk etymology）」の問題に気づいた。伝統的な生活様式の崩壊に伴い、植物、特に野生植物は、利用率の低下によりギャロンの人々の生活から消え去り、人々の植物名の記憶はぼやけはじめている。例えば、四土ギャロン語での小藜の名前には、3つのバリエーションがある：rbətɕəp, zbətɕəp, zbətɕək。一部の話者は、zbətɕəkの-tɕəkは、四土ギャロン語の「ta-tɕək つぼみ」に由来すると考えており、植物の外観は確かにつぼみを彷彿とさせる。しかし、それを茶堡ギャロン語の同根語rmba-tɕɯβと比較することにより、四土ギャロン語の形は民間語源を受け入れた形である可能性が高いと推測できる。民間語源の問題は解決するのが簡単ではなく、四土ギャロン語の小藜は、それを特定できる数少ない幸運なケースだ。

祖形の反映形と民間語源は、共時態として同時に存在し、それらの交替は比較的時間が経ってから発生している。この例は、フィールド言語学者は言語資料の収集に際して常に注意を払う必要があることを示している。言語学的調査は再確認と修正を繰り返すプロセスでなければならない。完全に正しい記録はなく、完全に役に立たない資料はない。時には「一見不規則な」形式も利用できるのである。